The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『說文解字繫傳』中の会意・形声について |
| Author(s) | 坂内, 千里 |
| Citation | 言語文化研究. 2022, 48, p. 77-91 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/87087 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 『説文解字繫傳』中の会意・形声について

坂　内　千　里

# On compound ideographs and phono-semantic compounds in the *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan*

SAKAUCHI Chisato

The *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan*（i.e. Xiao-Xu-ben), written by Xu Kai in the Southern Tang era, consists of two portions. The first 30 volumes contain his annotations upon the *Shuo-wen jie-zi* which is the oldest existing dictionary, and are named “Tong-shi pian”. In the latter 10 volumes, Xu Kai’s original argument is developed.

This paper examines the features of Xu Kai’s revision and annotations, focusing on compound ideographs and phono-semantic compounds which is included in the first portion, and comparing them with the *Shuo-wen jie-zi* revised by Xu Xuan.

キーワード：『説文解字繫傳』，大徐本，六書

## 一　はじめに

南唐 徐鍇（921–975：以下，小徐と称する）の著した『説文解字繫傳』は，現存する最古の字書である『説文解字』の全体を通して注釈を施した最初の著作である。『説文解字繫傳』（以下，小徐本と称する）は，『説文解字』（以下，『説文』と称する）の許慎の解説である説解に対して注釈を施した「通釋篇」30巻に，「部敍篇」2巻などの論10巻を合わせた全40巻から成る。

筆者は，この論10巻に含まれる「通論篇」3巻においては，各巻に取り上げられた文字をその構造（六書）に注目して見た時，「通論上」と「通論下」では，［会意］と［形声］の占める割合が逆転しており，「通論中」はその中間的位置にあること，及び「通論篇」全体では「通釋篇」より［会意］の割合が高く［形声］の割合が低くなっていること[1)]を明らかにした。

そこで，本論文では，小徐は「通釋篇」において，文字の構造をどのように取り扱っている

1）拙著『説文解字繫傳』「通論篇」考（一）（『言語文化研究』第47号　大阪大学　2021年）　pp.57–62参照。また，本論文における分類名として使用する際は，それぞれ［　］を付ける。

かを，［会意］と［形声］を中心に検討する。その際，小徐の注釈のみではなく，兄徐鉉等の校訂本（以下，大徐本と称する）との異同にも注目していく。

本論文では，最も善本と称せられる道光十九年（1839）寿陽祁氏（嶲藻）拠景宋鈔本重刊本の影印である中華書局本（1987年：以下，祁刻本と称する）を底本として使用し，引用に際しては，特に必要がない限り，反切を省略する。また，大徐本は同治十二年（1873）陳昌治改刻一篆一行本（中華書局　1983年第7次印刷版）を使用する。そのほか，段玉裁『説文解字注』（以下，段注と称する）を適宜参照し，経韻楼本（台湾芸文印書館　1979年第5版）を使用する。承培元『説文解字繫傳校勘記』（以下，校勘記と称する）については，中華書局本に附刻されているものを使用する。

また，本文中の数字は，原則として序数は漢数字で，数値は算用数字で表記する。また，書名・篇名及び（訓読を含む）引用文には原則として旧字体を用いるが，使用フォントの制限により旧字体になっていないものもある。

## 二　大徐本との異同

筆者は以前，小徐本の会意を以て解する傾向にあるという特徴について考察した際に，文字の構造を述べた部分を中心に大徐本と比較して，その異同の原因について簡単に考察した。しかし，その際は明確な結論は出なかった[2)]。それは，主として文字の構造を述べた部分にのみ着目して簡単な比較をしたのみであったためだと考えられる。そこで，本論文では，まず説解全体を比較することとする。但し，重文については，考察の対象である文字の構造について言及されることが少なく，また特有の問題もあるため，特に言及する必要がある場合を除いて，本論文の考察の対象外とする。

「通釋篇」全30巻中，「敍」2巻，及び小徐本の原本が失われたため大徐本を以て補われた巻二五を除く27巻を調査対象とする。

調査の結果，文末の「也」の有無，「蓋」と「蓋」のような異体字まで含めると，大徐本・小徐本間で何らかの異同があるものは，約3500条余[3)]であった。但し，文字の構造を述べる際に多く用いられる「從」は，小徐本では「従」が，大徐本では「从」が用いられているが，これを異同に含めると大部分の条で異同があることになるので，ここでは異同に含めない。

それでは，どのような異同があるか，具体的に見ていこう。異同部分について，段氏は「凡そ徐氏鉉鍇二本同じからざるは、各の其の長じたる者に从う（凡徐氏鉉鍇二本不同、各从其長者）」（一篇上　上部「旁」注）と言い，全てに注を付するわけではないが，適宜参照する。

2）拙著『説文解字繫傳』の特徴についての考察（一）（『言語文化研究』第20号　大阪大学　1994年）　pp.158–162参照。

3）文字の構造を説く部分に異同があるものが1100条余，それ以外の部分に異同があるものが2800条余。後述のように1条に複数の異同があり，両者を兼ねるものが約400条あるため，異同のある条の総数は3500条余となる。

なお，文字の構造を説く部分の記述の異同は，本論文の中心となる部分であるため，章を改めて考察することとし，ここではそれ以外の異同について概観する。

ではまず，本義（字義）を説いた部分に異同がある場合を見てみよう。以下，引用の中で注目する箇所には，下線を引いた。

1　譱　言也、從誩從羊、此義與美同意、臣鍇曰、通論詳矣　【小徐本　巻五　誩部】
　　譱　吉也、从誩从羊、此與義美同意　【大徐本　三上　誩部】

この条では，小徐本は本義を「言也」に作るのに対して，大徐本では「吉也」に作っており，段注（三上 誩部）は大徐に従っている。この「譱（善）」については，小徐は「通論下」（巻三五）では「善者、吉也」と述べている。このことから、小徐本も本来は「吉也」に作っていたものが，伝写の間に誤られたものと考えられる。校勘記（巻上）も大徐本に従うべきだとする。

2　兼　兼持二禾、秉持一禾、臣鍇曰、可兼持者、莫若禾也、會意、結添反、又曰、兼、
　　并也、從又手也、秝二禾也　【小徐本　巻十三　秝部】
　　兼　并也、从又持秝、兼持二禾、秉持一禾　【大徐本　七上　秝部】
3　曬　色介反、暴也、從日麗聲、所智反　【小徐本　巻十三　日部】
　　曬　暴也、从日麗聲、所智切　【大徐本　七上　日部】

まず「兼」の説解では、大徐本は「并わすなり，又の秝を持すに从う、兼は二禾を持し、秉は一禾を持す」となっており，体例通り最初に字義を述べ、次に文字の構造についての記述が続く。これに対し、小徐本は、「兼は二禾を持し、秉は一禾を持す」と，「秉」との違いのみを述べており，字義および文字の構造についての記述がない。小徐注および反切の後に，「又曰」として記されているものが，それに当たり，本来説解の最初にあるべきものである。さらに「從又手也、秝二禾也」の文にも誤りがあり，文意が通らない。このように，特に本来字義を述べるべき部分が大きく異なる場合は，小徐本のテキストの乱れに起因するものが相当数ある。巻十三にはもう一カ所、本来字義を述べる部分が大きく異なるように見える条がある。それが「曬」である。しかし、これも校勘記（巻上）に「色介反三字當在麗聲下、所智反三字衍（色介反の三字は當に麗聲の下に在るべし、所智反の三字は衍なり）」とあるように，小徐本の説解が伝写の間に誤写され，本来最後にあるはずの反切が本義の前に来てしまい，反切がなくなったことから，後に大徐本の反切に基づいて「所智反」を補ったために生じた異同であり、本来はともに字義は同じ「暴也」であったと考えられる。なお、段注（七上 秝部・七上 日部）では、共に大徐に従っている。

もちろん，本義を説いた部分に異同がある場合，全て小徐本に問題があるわけではない。

4　匪　如篋、從匚非聲、逸周書曰、實玄黃于匪　【小徐本　巻二四　匚部】
　　匪　器似竹筐、从匚非聲、逸周書曰、實玄黃于匪　【大徐本　十二下　匚部】

では，段氏はほぼ大徐本に従うものの，注に「小徐祇云如篋（小徐祇だ篋の如しと云うのみ）」（十二下 匚部）と小徐本の字義を併記している。また，同部の「匧（篋は或体）」の説解は「椷臧也」に作り，その注に「小徐本如是、大徐無椷字、木部椷下曰、匧也、是二篆爲轉注、臧字似衍（小徐本是くの如し、大徐に椷の字無し、木部椷の下に曰く、匧也と、是れ二篆轉注爲り、臧の字衍に似たり）」として，小徐本に従っている。

次に，発音に関する記述，他書からの引用などが欠落している場合を見てみよう。

5　梏　手械也、所以告天也、從木告聲、臣鍇曰、械之以告天也、尙書曰、天討有罪五刑五用哉　【小徐本　巻十一　木部】
　　梏　手械也、从木告聲　【大徐本　六上　木部】
6　**突**　滚也、一曰竈**突**、從穴火求省聲、讀若禮三年導服之導、臣鍇曰、滚字從此、古無禫字、借導字爲之、故曰、三年導服【小徐本　巻十四　穴部】
　　**突**　深也、一曰竈突、从穴从火从求省　【大徐本　七下　穴部】

「梏」の条では，大徐本には下線を引いた「所以告天也（天に告ぐる所以なり）」の部分がなく，段注は「所㠯告天の四字、周禮音義に依りて補う（所㠯告天四字、依周禮音義補）」（六上 木部「梏」注）としている。段氏の依拠した小徐本にもこの４字はなかったかもしれない。「**突**」の条では，同じく下線部「聲、讀若禮三年導服之導」が，大徐本にはない。段注（七下 穴部）には，大徐本と同じく「聲」の字はないが，その後の「讀みて禮の三年導服の導の若くす」はあり，この点は小徐本に従っている。

そのほか，字義の後の記述の順が異なる場合もある。

7　趯　行趯趯也、從走雚聲、一曰、行曲脊　【小徐本　巻三　走部】
　　趯　行趯趯也、一曰、行曲脊皃、从走雚聲　【大徐本　二上　走部】

では，下線部の別義の位置が，二徐で異なっている。段注（二上 走部）は，「皃」の字が付いているところは大徐に従うが，配列は小徐本に従う。注には言及がないが，『說文』の体例が，まず本義を説き，次に文字の構造に言及してから，別義・発音・用例などを述べることに基づき，小徐本を是としたのであろう。

異同の中には，発音の類似による誤記に起因するのではないかと考えられるものがある。

8　洫　十里爲成、成閒廣八赤、深八赤、謂之洫、從水血聲、論語曰、盡力于溝洫
【小徐本　巻二一　水部】
洫　十里爲成、成閒廣八尺、深八尺、謂之洫、从水血聲、論語曰、盡力于溝洫
【大徐本　十一上　水部】

9　**𢦏**　有枝兵也、從戈孰聲、周禮戟長丈六赤　【小徐本　巻二四　戈部】
**𢦏**　有枝兵也、从戈孰、周禮**𢦏**長丈六尺、讀若棘　【大徐本　十二下　戈部】
（参考）**𢦏**　有枝兵也、从戈榦省、周禮**𢦏**長丈六尺　【段注　十二下　戈部】

「洫」の条の「成の閒、廣さ八赤、深さ八赤、之を洫と謂う」，および「**𢦏**」の条の「周禮、戟の長さ丈六赤」の「赤」の字は，大徐本・段注（共に十一上・十一上二 水部，十二下 戈部）とも「尺」に作る。「赤」と「尺」は共に昌母・昔韻（入声）の音であり，伝写の間に「尺」を同音の「赤」と間違えたと考えられる。「溝」（巻二一 水部）の条の「水瀆、廣四赤、深四赤」，「く」の条（巻二二 く部）の「廣赤、深赤、謂之く」，「畷」の条（巻二六 田部）の「廣六赤」も同じであろう。しかし，このような例は巻二一から巻二六のみに見られ，他巻では「韝、韍也、所㠯蔽前、㠯韋、下廣二尺、上廣一尺、其頸五寸（後略）（韝は韍なり、前を蔽う所㠯、韋を㠯てす、下廣二尺、上廣一尺、其の頸五寸）」（巻十 韋部）のように「尺」に作る。巻二一から巻二六の書写を担当した者の特有の誤りであろうか。

「**𢦏**」（例文9）の条には，この他もう2箇所異同がある。文字の構造を説いた部分と，音注の有無である。まず文字の構造を説いた部分では，小徐は「戈に從う孰の聲」に作るのに対し，大徐本では「戈孰に从う」に作る。大徐は更に注に「臣鉉等曰、孰非聲、義當从榦省、榦枝也（臣鉉等曰く、孰は聲にあらず、義は當に榦の省に从うべし、榦は枝なり）」と言う。段注は「戈・榦の省に从う」に作り，注に「省作聲者、誤、今依徐鉉正（省を聲に作る者は，誤りなり，今徐鉉に依りて正す）」と言う。つまり，大徐が「孰は聲にあらず、義は當に榦の省に从うべし」と言うこと，及び小徐本の「孰聲」は，元々「孰省」であったものが，「聲」と「省」の音が類似していた（共に梗摂）ために伝写の間に誤られたとの考えに基づいて，説解を「榦省」に改めているのである。また，音注については，「紀逆切」（見母・陌韻・梗摂）の「**𢦏**」の音を表すものとして「己力切」（見母・職韻・曽摂）の「棘」はふさわしくないため，「按大徐有讀若棘三字、非也（按ずるに大徐に讀若棘の三字有るは、非なり）」と言う。このように，段氏は文字の構造については大徐の説に従いつつ修正を加え，音注については小徐本に従い削除している。また二徐本間には，この「**𢦏**」の条のように，複数箇所異同がある場合も多い。

二徐本間の異同には，上記の異同以外に，部の配列順の異同や，部内の文字の配列順の異同もある。これらの異同は先ほどの異同の総数に含まれていない。部の配列順の異同とは，例えば小徐本では「京部→亯部→𦎫部→亭部→**亩**部」（巻十）となっているのに対して，大徐本では「京部→亯部→亭部→𦎫部→**亩**部」（五下）となっているようなものである。部内の配列順の異

同は，刀部（巻八），手部（巻二三）など，かなり多い部もあり，全体で400条以上ある。手部のうち異同の多い部分の配列を見てみよう。大徐本十二篇上十三葉から十四葉にかけての配列は次のようになる。漢字の前につけた数字は小徐本の配列順を示す。小徐本と配列順が異なる部分は「⇨」で示した。

60掾→61**拓**→62拊→63掊⇨54捋→55撩⇨57措⇨56插⇨58掄⇨78擇→79捉
→80搤→81挻→82揃→83搣→84批⇨244揤⇨249捽⇨197撮⇨85**鞠**（掏）→86擶
⇨66捊→67揜→68授→69承

手部では所々にまとまった文字群が挿入されるという形で配列順の異同が現れており，このことは，大徐本或いは小徐本が基づいたテキストで，早い時代に錯簡が起こった可能性を示唆しているのではないだろうか。

このように部の配列順や部内の文字の配列順に異同があり，また，これまで見てきたように二徐本間に，単に伝写の間の誤記に起因するとは考えにくい異同が多数存在している。これらのことから，二徐本間の異同は，基本的に，それぞれが基づいたテキストが異なっていたことに起因すると考えた方が自然であろう。

## 三　文字の構造に関する記述に於ける異同

それでは次に，二徐本間の文字の構造に関する記述部分の異同について見てみよう。

まず，文字の構造に関する記述部分の異同1100条余を，その種類別に見てみよう。

10　元　始也、<u>從一兀</u>、臣鍇曰、元者善之長、故從一、元首也、故謂冠爲元服、故從兀、
　　兀高也、與堯同意、俗本有聲字、人妄加之也、會意　【小徐本　巻一　一部】
　　元　始也、<u>从一从兀</u>、徐鍇曰、元者善之長也、故从一　【大徐本　一上　一部】

ここでは，小徐本が「一兀に從う」となっているのに対して，大徐本は「一に从い、兀に从う」となっており，二つ目の構成要素[4)]の前にも「從（从）」の字が入っている。段氏は，「吏」の条の「从一从史」（一上 一部）の注に「天下曰从一大、此不曰从一史者、吏必以一爲體、以史爲用、一與史二事、故異其詞也（天の下に一大に从うと曰い、此に一史に从うと曰わざる者は、吏は必ず一を以て體と爲し、史を以て用と爲せばなり、一は史と二事たり、故に其の詞を異にするなり）」と言い，二つめ以降の構成要素の前に「從（从）」の字を入れるか否かにも意味があるとするが，共に

4）漢字を構成する部分について，本論文では，「偏旁」ではなく「構成要素」と表現する。

［会意］であることに違いがないため，相違点としての考察対象とはしない。この種の異同は，1100条余のうち，290条余となる。また，

11　羊　祥也、從艸、象四足尾之形、孔子曰、牛羊之字、以形擧也、凡羊之屬皆從羊、臣鍇曰、說禮者云、羊吉祥也　【小徐本　巻七　羊部】

　　羊　祥也、从艸、象頭角足尾之形、孔子曰、牛羊之字、以形擧也、凡羊之屬皆從羊　【大徐本　四上　羊部】

では，象る形に違いはあるが，文字の一部が象形による文字である点に違いはない。このように，個々の文字を考える場合には重要な異同となるが，文字の構造が六書のうちどれに分類されるかについては違いがないもの，「盍」と「盇」（巻三 口部「嗑」）など字体の違いや，構造を説く文の最後に「也」があるか否かなどの細かな異同は，1100条余のうち，420条余となる。

なお，「羊」のように，文字と文字になっていない形からできている文字を，段氏は「合体の象形」と呼び，「合體者、从某而又象其形、（略）獨體之象形、則成字可讀、軵於从某者、不成字不可讀、（略）此等字半會意、半象形、一字中兼有二者（合體なる者は、某に从い又た其の形に象る、（略）獨體の象形なれば、則ち字を成し讀む可きなり、某に从うに軵する者は、字を成さずして讀む可からず、（略）此等の字は半會意、半象形にして、一字中に兼ねて二者有り）」（十五上 敍）と言う。この段氏が「合体の象形」と呼ぶものを，本論文では［象形＋会意］に分類する。また，一部が文字となっていないものの中には，それ以外の構成要素が声符となっているものがあるため，それらは［象形＋形声］に分類する。

上記2種類の異同は，二徐ともに［会意］，二徐ともに［象形］となり，同一カテゴリー内の異同であるが，残りの約400条は，それぞれ異なるカテゴリーに属する。次に，この残りの約400条に注目して，考察を進める。

まず，大徐本・小徐本それぞれ［象形］・［象形＋会意］・［象形＋形声］・［会意］・［亦声］・［形声］に分類していく。亦声とは，段氏が「凡言亦聲者、會意兼形聲也（凡そ亦聲と言う者は、會意 形聲を兼ぬるなり）」（一上 一部「吏」）と説明するように，構成要素の一部が声符と意符を兼ねるものを指す。なお，指事・転注・仮借については，説解にはほとんど言及されない上，指事と象形，指事と会意については形式上では区別が難しいため，上記6分類とする。

いくつか例を挙げておこう。

12　**𤰈**　門戸疏窗也、從疋囪、囪象𤰈形、讀若疏、臣鍇曰、古言綺疏也、指事　【小徐本　巻四　疋部】

　　**𤰈**　門戸疏窗也、从疋疋亦聲、囪象𤰈形、讀若疏　【大徐本　二下　疋部】

13　**𦣻**　告也、從册曰、臣鍇曰、曰告之也、會意　【小徐本　巻九　曰部】

**𦍒**　告也、从曰从册册亦聲　【大徐本　五上　曰部】

14　劣　弱也、從力少、臣鍇曰、會意　【小徐本　巻二六　力部】

劣　弱也、从力少聲　【大徐本　十三下　力部】

「**𦍒**」（例文12）では、小徐本は［象形＋会意］とするが，大徐本は「疋」が声符ともなるとする。大徐本は［象形＋亦声］とすべきだが，分類が繁雑になるため［象形＋形声］に分類する。また，「**𦍒**」（例文13）では，小徐本が［会意］とし，注でも「曰は之を告ぐ也」と［会意］である故を説いているのに対し，大徐本は［亦声］としている。「劣」（例文14）では，小徐本がやはり［会意］とし，注でも［会意］であるとするが，大徐本では［形声］となっている。

15　秫　稷之黏者、從禾朮聲、臣鍇曰、黏者柔懦也、𠂇者、象其體柔撓、八其米也、言聲、傳寫誤加之、下有朮字、不當言聲、若許愼不知、則當言闕

【小徐本　巻十三　禾部】

秫　稷之黏者、从禾、术象形　【大徐本　七上　禾部】

16　狯　犬食也、從犬舌聲、讀若比目魚鰈之鰈、臣鍇曰、以舌呑物、會意

【小徐本　巻十九　犬部】

狯　犬食也、从犬从舌、讀若比目魚鰈之鰈　【大徐本　十上　犬部】

17　奐　取奐也、一曰大、從收㒸省聲、臣鍇曰、美哉奐焉、奐大也　【小徐本　巻五　**收**部】

奐　取奐也、一曰大也、从廾㒸省、臣鉉等曰、㒸營求也、取之義也

【大徐本　三上　廾部】

「秫」（例文15）では，小徐本の説解は［形声］となっているが，小徐は注に「聲と言うは、傳寫誤りて之を加う、下に朮の字有り、當に聲と言うべからず」と述べる。「下に朮の字有り」とは，或体として「朮」の字が挙げられていることを指す。大徐本は［象形＋会意］とする。「狯」（例文16）では，小徐本の説解はやはり［形声］となっているが，小徐は「舌を以て物を呑む」ことから，「舌」は字義と関わりがあり，「會意」であると注している。大徐本の説解は［会意］になっている。「奐」（例文17）では，説解に「聲」の字があるか否かにより，「㒸省聲」とする小徐本は［形声］，「㒸省」とする大徐本は［会意］となる。

これら約400条の分析結果をまとめたものが，［表1］である。表中の「省声」は，「奐」（例文17）の小徐本のようなもので，声符となる文字が，全体ではなくその一部が構成要素となるものを言う。分類では［形声］となるが，異同が多いため，表では他の形声と区別して示してある。「カテゴリー内」とは，本章の最初に示した「從（从）」の字の有無など，文字の構造が六書のうちどれに分類されるかについては違いがない720条余の異同を，参考として示したものである。

表 1

| | | 小徐本 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 象形 | 象形＋会意 | 会意 | 亦声 | 象形＋形声 | 形声 | 省声 |
| 大徐本 | カテゴリー内 | 17 | 31 | 282 | 67 | 3 | 297 | 27 |
| | 象形 | | | 1 | | 4 | | 1 |
| | 象形＋会意 | | | | | 2 | 1 | 1 |
| | 会意 | | 3 | | 18 | | 169 | 22 |
| | 亦声 | | | 6 | | | 52 | |
| | 象形＋形声 | | 1 | | | | | |
| | 形声 | | | 31 | 14 | | | *16* |
| | 省声 | | 1 | 6 | 2 | | *43* | |

ここで目につくのは，小徐本が［形声］である文字を，大徐本は［会意］・［亦声］としているもの，小徐本が［亦声］で，大徐本が［会意］となっているものなど，小徐本では声符としているものを大徐本では意符とするものが非常に多いということである。［表 1］で背景が濃い灰色となっているものがそれである。逆に大徐本が［形声］であり小徐本が［会意］・［亦声］となっているものもあるが，数としては圧倒的に少ない。［表 1］では，淡い灰色で示している。また，分類上は同じ［形声］であるが，二徐本間で声符とするものが多く異なっており，文字の構造についての二徐の考え方の違いを表すのではないかと考えたため，参考までに［形声］と［省声］の異同として示している。［表 1］でイタリックになっているのがそれである。以下の考察では，どちらも［形声］として扱う。

次章では，以上の 2 点について，小徐注も参考にして考察する。

## 四　六書に関する小徐注

小徐注のうち六書に関する記述は，約730条ある[5)]。まず，これらの注には，どのようなものがあるか見ておこう。

18　毎　艸盛上出也、從屮母聲、臣鍇曰、屮則象上出也　【小徐本　巻二　屮部】

19　鬲　鳥在巢上也、象形、日在西方而鳥鬲、故因以爲東鬲之鬲也、凡鬲之屬皆從鬲、臣鍇曰、此本象鳥棲也　【小徐本　巻二三　鬲部】

20　爭　引也、從爫厂、臣鍇曰、厂所爭也、指事　【小徐本　巻八　爫部】

21　軎　車軸耑也、從車、象軎之形、杜林說、臣鍇曰、指事　【小徐本　巻二七　車部】

5）本章で取り挙げる特にテキストの校訂に関わる注の多くは，古敬恒氏が『徐鍇《說文繫傳》研究』第六章「《說文繫傳》與校勘」（重慶大学出版社　1995年　pp.185-195）の中で取り挙げ，その是非を論じている。しかし，ここでは，小徐の注の是非は主眼ではないので，いちいちは取り挙げない。

例文18では「屮は則ち上に出づるに象るなり」，例文19では「此れ本と鳥の棲に象るなり」と言い，文字の一部あるいは全体が象っているものを説明している。例文20では，「厂」を「受（両手）」が取り合うことから「引く」という意味になり，例文21では，「口」で車軸の端を指し示しているため，共に「指事」であると言う。このように，「象形」または「某某に象る」というものは，約100条あり，「指事」とするものは約60条ある。

22　龠　樂和龠、從龠皆聲、虞書曰、八音克龠、臣鍇曰、今尚書作諧、假借
【小徐本　巻四　龠部】
23　晰　昭晰明也、從日折聲、禮曰、晰明行事、臣鍇曰、今禮記作質明、假借
【小徐本　巻十三　日部】

例文22では「今尚書諧に作るは假借なり」と言い，例文23では「今禮記質明に作るは假借なり」と言う。或いは「借なり」とも言うが，何れも造字法としてではなく，用字法としての仮借を言う。

24　翏　高飛也、從羽参、臣鍇曰、参新生羽而飛也、長羽短羽相副、然後能高飛也、會意
【小徐本　巻七　羽部】
25　**𠬝**　楚人謂卜問吉凶曰**𠬝**、從又持祟、讀若贅、臣鍇曰、祟神禍也、此會意
【小徐本　巻六　又部】
26　敖　游也、從出放聲、臣鍇曰、詩曰、微我無酒、以遨以遊、出放爲敖也、會意
【小徐本　巻十二　出部】

例文24以下3例は，小徐が「會意」と注するものである。例文24では，「参は新たに羽を生じて飛ぶなり、長羽短羽相い副うて、然る後に能く高く飛ぶなり」と，説解が「羽参に従う」とする所以を説いている。このように，小徐の注で「會意」という場合は，説解が［会意］であるものが多い。因みにこの条は大徐本（四上 羽部）でも［会意］である。例文25でも，説解の「又の祟を持すに従う」に対して，「祟は神禍なり、此れ會意」とその［会意］である所以を説く。この条では，大徐本（三下 又部）は「从又持祟、祟亦聲」に作り，［亦声］とする。例文26では，説解が「出に従う放の聲」と［形声］であるが，小徐は『詩』の引用に続けて「出放を敖と爲すなり、會意」と言い，「放」は声符ではなく［会意］の文字だとする。大徐本（六下 出部）は「从出从放」に作り，［会意］となっている。小徐の注に「會意」というものは，400条余で，二徐本の説解のうち文字の構造に関する部分に異同があるものと，異同がないものは共に約200条となっている。

27　貧　財分少也、從貝分聲、臣鍇曰、按原憲曰、無財謂之貧、貝分則少也、當言分亦聲、脫誤也、會意　【小徐本　巻十二　貝部】

例文27は，小徐の注に「亦聲」と言う例である。ここでは，財は分ければ少なくなるということから，「分」は意味も表していると考え，「當に分亦聲と言うべし、脫誤なり、會意」と言う。大徐本（六下 貝部）は「从貝从分、分亦聲」に作る。小徐の注に「亦聲」と言うのものは12条あり，そのうち10条は，二徐本の説解のうち文字の構造に関する部分に異同がある。

小徐が，個別の文字に対して，その注の中で「形聲」と言うことはない。［形声］に関しては，次のような言及をすることが多い。

28　神　天神、引出萬物者也、從示申聲、臣鍇曰、申卽引也、疑多聲字、天主降气、以感萬物、故言引出萬物也　【小徐本　巻一　示部】

例文28では，小徐は「申は卽ち引なり、疑うらくは聲の字多し」と注しており，「申」は引くという意味を表しており，声符とするのは間違いだと考えている。大徐本（一上 示部）では，「从示申」と「聲」の字がなく，［会意］となっている。［形声］に関しては，このように，説解で声符とされる構成要素に対して，それが声符であることに様々な形で疑問を呈している。

六書に関する注の中には，それぞれの構成要素の発音や意味を記したものもあるが，以下の考察では，ここまで見てきたような，六書の分類に関わる注を対象とする。

それでは，小徐本が［形声］で，大徐本は［会意］・［亦声］となっているものから，小徐の注がどのようになっているか見ていこう。

小徐本が［形声］（前述のように，ここでは［省声］を含む）で，大徐本が［会意］になっているもの全191条中，六書の分類に関わる注のあるものは41条である。そのうち最も多いのは，「會意」と注するもので29条，次に多いのが「聲」の字が衍字である疑いを述べたもので9条，その他が6条である。また，これらを組み合わせた注もある。

29　普　日無色、從日竝聲、臣鍇曰、日無光、則近遠皆同、故從竝、有聲字、傳寫誤多之也、會意　【小徐本　巻十三　日部】

普　日無色也、从日从竝、徐鍇曰、日無光、則遠近皆同、故从竝　【大徐本　七上　日部】

30　置　赦也、從网直聲、臣鍇曰、從直、與罷同意、非聲、亦會意、置之、則去之也　【小徐本　巻十四　网部】

置　赦也、从网直、徐鍇曰、从直、與罷同意　【大徐本　七下　网部】

例文29では，「聲の字有るは、傳寫誤りて之を多くするなり、會意」と言い，本来「日竝に従う」会意字であったと考えている。大徐本では，「日に从い竝に从う」に作り，小徐の注を引用している。例文30では，小徐は，「直」はその次の文字である「罷」と「意を同じく」することから，「罷」が「网能に従う」のと同様に，「直」は声符ではなく会意字であると言う。大徐本では「网直に从う」に作り，その小徐の注を引用する。

この2条だけを見ると，大徐が小徐の注を受けて説解を改め，その根拠として小徐の注を引用したのではないかとも考えられる。実際，筆者もかつてその可能性を疑った[6)]。しかし，上述のように，この種の異同のある全191条中，六書の分類に関わる注のあるものは41条で，4分の1にも満たない。その上，注の中には「仕、學也、從人士聲、臣鍇曰、會意字」（巻十五 人部）のように，単に［会意］であることを述べるのみで，根拠を示す説明のないものもある。また，大徐本の方から見ても，六書の分類に関わる小徐の注を引用するものは，「通釋篇」全28篇中，僅か55条に過ぎない。

これらのことは，やはり六書の分類に関わる異同も，単なる誤記や，小徐の注に基づく校訂の結果であると考えることはできず，やはり二徐が基づいたテキスト・資料の違いに拠るところが大きいと言えよう。六書に関わる小徐注約730条中，大徐本に校訂の根拠として引用されるものが55条と非常に少ないのは，小徐注には簡単な注が比較的多いということもあるが，大徐が複数の資料を総合的に考慮した結果であるとも言えよう。

では次に，小徐本が［形声］で，大徐本が［亦声］であるもの52条と，小徐本が［亦声］で，大徐本が［会意］となっているもの18条を併せて見ておこう。小徐本に六書の分類に関する注があるものは，それぞれ3条と6条となる。

31　貧　財分少也、<u>從貝分聲</u>、臣鍇曰、按原憲曰、無財謂之貧、貝分則少也、當言分亦聲、脫誤也、會意　【小徐本　巻十二　貝部】
　　貧　財分少也、<u>从貝从分</u>、<u>分亦聲</u>　【大徐本　六下　貝部】
32　昌　美言也、<u>從日從曰</u>、<u>曰亦聲</u>、昌一曰日光也、又詩曰、東方昌矣、臣鍇按、詩曰、猗嗟揚兮、美目昌兮、昌美也、尚書曰、禹拜昌言、昌言卽當言也、<u>曰亦言也</u>、<u>此會意字</u>、<u>言亦聲</u>、<u>後人妄加之</u>、<u>非許愼本言也</u>、昌卽明也、東方昌矣、卽東方明矣、故晉孝武帝以東方明時生、名曰昌明也　【小徐本　巻十三　日部】
　　昌　美言也、<u>从日从曰</u>、一曰日光也、詩曰、東方昌矣、臣鉉等曰、<u>曰亦言也</u>
　　【大徐本　七上　日部】

例文31（例文27の再掲）では，小徐は，説解の「貝に従う分の聲」に対して，「分」は意味も表し

6）注2）所掲の拙著　pp.158–161参照。

ていると考え，「當に分亦聲と言うべし、脱誤なり、會意」と言う。大徐本は「从貝从分、分亦聲」に作る。例文32では，小徐は説解の「日に從い曰に從う、曰は亦た聲」に対して，「曰」にも「言」という意味があるため，「此れ會意の字、亦聲と言うは、後人妄りに之を加う、許愼の本言にあらざるなり」と言う。大徐本では説解を「日に从い曰に从う」のみとしている。ここで考察の対象とした70条中９条に付されている小徐の注を，大徐は「徐鍇曰」として引用することはない。しかし，「昌」の条で徐鉉の注として挙げる「曰は亦た言なり」は，全く同じ句を既に小徐が［会意］とする根拠として挙げている。

最後に，小徐本が［会意］・［亦声］，大徐本が［形声］とするもの全51条，そのうち六書の分類に関する小徐の注があるもの７条を見ておこう。

33　劣　弱也、從力少、臣鍇曰、會意　【小徐本　巻二六　貝部】
　　劣　弱也、从力少聲　【大徐本　十三下　力部】
34　蓳　推也、從艸從日、艸春時生也、屯亦聲、臣鍇曰、春陽也、故從日、屯草生之難也、故云亦聲　【小徐本　巻二　艸部】
　　蓳　推也、从艸从日、艸春時生也、屯聲　【大徐本　一下　艸部】

例文33（例文14の再掲）では，小徐本は説解も［会意］であり，注にも「會意」としているが，大徐本の説解は［形声］である。例文34でも，小徐本は説解も注も［亦声］であるが，大徐本の説解は［形声］である。ここで取り挙げた51条のうち，大徐本に小徐の注を引用するものは「牀」（巻十一　木部，六上　木部）のみである。小徐本は「從木爿」に作るのに対し、大徐本は「從木爿聲」に作る。小徐は『左傳』を引用しながら「牀」の字が会意である所以や，「爿」についての説明など，かなり長い注を付けている[7)]。大徐は「徐鍇曰」として文言などに変更を加えつつその長い注をほぼ全て引用しているが，説解は［形声］としており，小徐の説に従って［会意］とはしていない。

ここまで，小徐本と大徐本の異同について，［会意］と［形声］を中心に見てきた。その結果，二徐本の異同は，伝写の間の誤記に起因するものも存在するであろうが，その多くが基づくテキスト・資料が異なることに起因することが明らかになった。

ところで，小徐が，「聲」の字が衍字であるなど，声符に対する疑いを述べる表現には様々なものがある。その１つに，衍字が生まれる原因について述べたものがある。「𦉢、光也、從日𦉢聲」（巻十三　日部）に対して、「𦉢」の音に対する考察を加えた上で，「自許氏沒、傳寫者、不曉

7）小徐本の原文は以下の通りである。「牀、安身之几坐也、從木爿、臣鍇曰、牀卽以安身也、春秋左傳曰、薳子馮僞病掘地下冰而牀焉、至今恭坐則榻也、故從木爿、爿（女革反、牀所從）則疾字之旁、象人之斜身有所倚著、實不成字、至于牆牂戕竝從牀字之省、形竝在右、其左竝曰聲、李陽冰妄言木字右旁爲片、左旁爲爿、云爿音牆、且說文竝無爿字、又牀從爿、與字殊異、又片字直、而爿字斜欹、則陽冰之謬妄、不言可悉也、會意」

本意、多要妄加聲字也（許氏の沒する自り、傳寫する者、本意を曉らず、多く妄りに聲の字を加うるを要むるなり）」と言う。許慎の時代から時を経て，その意符たる意味がわかりにくくなったためであるとする。これらは正すべきものであるという意識はあるが，それでも説解を改めることがないのはなぜだろうか。

35　元　始也、従一兀、臣鍇曰、元者善之長、故従一、元首也、故謂冠爲元服、故従兀、兀高也、與堯同意、俗本有聲字、人妄加之也、會意　【小徐本　巻一　一部】

36　普　日無色、従日竝聲、臣鍇曰、日無光、則近遠皆同、故従竝、有聲字、傳寫誤多之也、會意　【小徐本　巻十三　日部】

小徐は，例文35（例文10の再掲）では「俗本」と言っており，基づいたテキスト・資料が複数あったと考えられる。その中に「聲」の字が付いていないものがあったので，説解は「従一兀」とし，注記を残した。例文36（例文29の再掲）では「聲」の字の付いていない資料がなかったため，説解の「聲」の字は削除せずそのままにして，注に自らの考えを述べるにとどめたということであろう。

このように，小徐は，それが会意の文字であると考えても，それを裏付けるテキストや資料がない場合，説解を改めずに，その注に自らの考えを述べるにとどめていたと考えられる。

小徐の六書論は，「上」の条（巻一 上部）の注と「疑義篇」に詳しい[8]が，簡単にまとめると，次のようになる。六書には順があり，「形に象るべき」ものがあれば象形に依り文字を作り，そのような形はないが「勢いの指すべき」ものがあれば指事に依り，そのどちらもないが「意の会すべき」ものがあれば会意に依り，それらすべてがない場合始めて形声に依り文字を作るとする。そのような六書に対する考えを持つ小徐にとって，意味のつながりがある構成要素を声符とすることはあり得ないことであろう。

「通釋篇」は，許慎の説解に対する注であり，説解の校訂に当たっても資料の制約がある。資料の裏付けがない場合，説解を改めることまではできない。「通釋篇」の後に付された論10巻の中心的な存在である「通論篇」には，それらの制約なしに，自らの考えを自由に展開する場としての意味もあったのではないだろうか。それ故，「通論篇」では形声あるいは亦声とされる文字を説く際に，その意味的繋がりを説くことに重きを置き，声符であることに言及することが少ない[9]のではないだろうか。

また，このような六書に対する考え方は，段氏とはかなり異なる。段氏は，「元」の条（例文35）の説解「従一兀」を「从一兀聲」に改めた上で，その注に「徐氏鍇云、不當有聲字、以髡从兀聲、軏从元聲例之、徐說非、古音元兀相爲平入也、凡言从某某聲者、謂於六書爲形聲也、

8）拙著『說文解字繫傳』「通論篇」考（一）（『言語文化研究』第47号　大阪大学　2021年）　pp.60–61参照。

9）注8）所掲の拙著　pp.59–60参照。

凡文字有義有形有音、爾雅已下、義書也、聲類已下、音書也、說文、形書也、凡篆一字、先訓其義、若始也、顚也是、次釋其形、若从某某聲是、次釋其音、若某聲及讀若某是、合三者以完一篆、故曰形書也（徐氏鍇云う、當に聲の字有るべからずと、髡の兀聲に从い、軏の元聲に从うを以て之を例すれば、徐說非なり、古音の元・兀は相い平入爲る也、凡そ某に从い某の聲と言う者は、六書に於いては形聲爲るを謂う也、凡そ文字に義有り形有り音有り、爾雅已下は、義の書也、聲類已下は、音の書也、說文は、形の書也、凡そ一字を篆とし、先ず其の義を訓ず、始也、顚也の若きは是れなり、次に其の形を釋す、某に从う某の聲が若きは是れなり、次に其の音を釋す、某の聲及び讀みて某の若くすの若きは是れなり、三者を合して以て一篆を完うす、故に形の書と曰う也）」と言う。段氏は，『說文』が字形の書と言われる所以は，1つの文字の形音義すべてを説くからだと考え，字音は「某の聲」或いは「讀若」などで表わされるとする。『說文』で「讀若某」・「讀如某」・「讀與某同」などの音注があるものは大徐本・小徐本共に700条前後であり，その他の約8500条では，文字の一部が声符としての役割を担っていることになる。すべての文字に当てはまるか否かはさておき，段氏においては，基本的に文字の構造を考える上で，声符となり得るかどうかが重要となる。

このように，文字の構造を考える際に，意味を重んじる小徐に対して，段氏は音を重んずると言えよう。そのことはまた，「瓃」（一上 玉部）の説解「从王畾聲」に対して「凡從畾字、皆形聲兼會意（凡そ畾に從う字は、皆な形聲の會意を兼ぬ）」と言い，声符が意味も兼ね表すことを注することよりも，「酉」（三上 酉部）の説解「从矛酉」に対して「酉なる者は入るの意なり、小徐酉聲に作る、會意の形聲を兼ぬる也（酉者入意、小徐作酉聲、會意兼形聲也）」と，意符が字音をも表すことを注する方が明らかに多い[10]ことにも，表われていると思われる。

小徐と段氏の違いは，もう1点ある。「元」篆は，大徐本・小徐本ともに「從一兀」に作り［会意］としているのに対して，段氏は「從一兀聲」と［形声］に改める。その根拠は，小徐の注に「俗本有聲字」と言うこともあるが，主に音声的に考えて声符になり得るかどうかであり，他の条でも，古典籍の引用などの根拠となる資料がなくても，『說文』の体例など理論的根拠のみで説解を改めることがある。これは，説解を改めるに足る資料がなければ，注記のみにとどめて説解を改めない小徐の態度と大きく異なる。さらに，文字の構造を考える際に，音声を重視する段氏と，意味を重視する小徐では，その校訂結果であるテキストに，伝写の間の乱れを除いたとしても，大きな違いができることになる。今後，小徐本の問題を考える際，段注の使用には注意を要するであろう[補注)]。

10）検索の結果，段氏が「形聲兼會意」と注するものが5例，「會意兼形聲」と注するものが20余例見つかった。このように，意符が声符を兼ねることを注する条が，声符が意符を兼ねることを注する条の4倍以上となっている。

補注）『說文文本演變考　以宋代校訂爲中心』（白石將人　中華書局　2021年9月）第四章に，本論文と一部内容が重なる部分があることに，印刷中に気付いた。論文中に組み込むことができなかったので，ここに付記する。